

名作の舞台から

映画『眉山』 (徳島県徳島市)

大日本ダイヤコンサルタント株式会社
佐治 雅之(会誌編集専門委員)
SAJI Masayuki

概要

映画「眉山－びざん－」は、シンガーソングライターで作家のさだまさし原作による小説をもとに、2007年に公開された感動のヒューマンドラマである。舞台は美しい自然と歴史、伝統文化が息づく徳島県徳島市。

東京で旅行代理店に勤務する主人公・河野咲子(松嶋菜々子)は、突然、徳島で暮らす唯一の家族である母・龍子(宮本信子)が病に倒れ入院したという知らせを受け、十数年ぶりに故郷に戻る。父の顔を知らず、母と二人きりで育った咲子は、厳しくも愛情深い母との間に言い知れない距離を感じてきた。生粋の江戸っ子で正義感も強く、“神田のお龍”と呼ばれ周囲からの信頼も厚かった龍子だが、自身が経営していた小料理屋を畳む時もケアハウスに入所する時も、また死後に自らの亡骸を「献体(遺体を大学病院に寄付し、医学生たちの勉強の材料となること)」にすることも、娘の咲子には何の相談もなく決めてしまった。そんな母の身勝手さに、咲子は反発を感じていた。龍子は自らの過去や咲子の父のことについても固く口を閉ざしてきたが、病をきっかけに次第に母娘は向き合い、互いの本音

や、隠されてきた思いが明らかになっていく。

物語の中で、徳島市の象徴である眉山や新町川、夏の風物詩・阿波おどりとといった四国徳島ならではの情緒豊かな風景が描かれ、地域の文化や人々の営みが色濃く表現されている。母の深い愛情と、これまで知ることのなかった母の秘密、そして娘・咲子が自分自身と向き合い、前に進む勇気をもらうまでの心の成長が丁寧に描かれている。また、医師で、のちに咲子の夫となる寺澤大介(大沢たかお)が母娘に寄り添い支える様子が物語の陰影をいっそう鮮明にしている。

母への想い、家族の絆、赦しや別れの切なさを、静かながらも力強く描いた本作は、多くの人々の共感と感動を呼び起こした。主演は松嶋菜々子。宮本信子、大沢たかおら豪華キャストが共演し、徳島の美しい景色とともに物語を彩っている。

眉山

徳島市の中心に優美な稜線を描く眉山(標高290m)は、古来より「阿波の眉」と称され、市民の生活と精神を支えてきた象徴的存在である。古くは『万葉集』にも詠まれた由緒ある独立峰で、歌人船王によって「眉のごと 雲居に見ゆる阿波の山 かけて漕ぐ舟 とまり知らずも」と歌われ、吉野川河口を行き交う船人にとって格好の目標であったことがうかがえる。中世になると眉山は殿様や町民が花見や月見を楽しむ行楽の地にもなった。江戸後期には千本桜が藩の名所と謳われ、庶民も自由に登れる憩いの場へ。明



写真1 眉山(吉野川越し)



写真2 眉山山頂



写真3 徳島市街(眉山山頂から)



写真4 新町川水際公園

治期には気象観測所や無線電信所が置かれ、1958(昭和33)年にはロープウェイが開通、夜景スポットとして全国に知られるようになる。現在は全面が眉山公園として整備され、四季折々の花木とともに展望台から紀伊水道や淡路島まで一望できる。山麓の両国橋周辺では毎年8月、阿波おどりの鳴り物がこだまし、太古からの自然と現代の熱狂が交差する。“眉の山”は万葉の昔から徳島市民の暮らしと心象を映し続ける永遠のランドマークである。

映画の舞台

・眉山(吉野川越し)

咲子が空港から病院に向かうシーンや若き日の龍子が咲子の父と歩くシーンで吉野川越しに映る眉山。街のどこからでも見える穏やかな稜線は“咲子を見守る母の愛”や“ふるさとの包容力”を感じさせる。

・眉山山頂

咲子が寺澤に母、龍子のことを相談するシーンが撮影された。映画では夕暮れ時に撮影され夕闇の徳島市が美しく描かれていた。

・徳島市街(眉山山頂から)

眉山山頂からは徳島の街、新町川、吉野川、紀伊水道、淡路島などが一望できる。

・新町川水際公園

咲子が母と阿波おどりをしている最中に演舞場を抜け出し、父を探すシーンや寺澤と咲子が二人で歩くシーンが撮影された。

・南内町演舞場

映画のクライマックスシーンで龍子と咲子、寺澤らが阿波おどりを観覧するシーンが撮影された。総踊りの様子は圧巻であった。

<写真提供>

写真1 米山賢

写真2、6、7 佐治雅之

写真3、4、5 松田明浩



写真5 南内町演舞場

現地を訪れるなら

徳島駅から徒歩10分程度、眉山山頂に向かうロープウェイの発着地にもなっている「阿波おどり会館」では、毎日昼・夜の複数回、阿波おどりの公演が行われている。映画でも重要な役割を担う本場の阿波おどりを目の前で見ることができ、さらに観客も参加して踊ることもできる公演は必見。



写真6 阿波おどり会館外観



写真7 阿波おどり公演